# 「立花宗茂と闇千代」物語

～こんな大河ドラマが見てみたい～ 〈第9話〉

■文＝小山田桐子／㈱D&N ■イラスト＝大久保ヤマト
※この物語は史実を基に、一部フィクションで作成されています。

【問】市観光課観光推進係（☎77・8563）

第2章

## 青年武将宗茂、九州の争乱で戦の才を発揮！ 一躍スターダムに！④

**柳川で大名としての新生活がスタート**

**率直な宗茂ならではの、〝風通しのよい職場〟づくり**

新緑の季節。新しい城地・柳川での生活が始まる。

宗茂と闇千代は筑後川沿いの道に、馬を進めていく。手入れの行き届いた田んぼの緑が視界いっぱいに広がる。その豊かな光景は、強い思い入れのある立花城を離れることになり、落ち込んでいた闇千代の心を弾ませる。

すっかり新しい領地にほれ込んだ闇千代は自ら進んで、民人たちの陳情をきく機会を設けた。どんな小さなことも、直接、耳を傾けてくれる。そんな闇千代が民人たちから熱烈に愛されるようになっていく。

宗茂もまた、大名として体制を整えるべく、忙しい日々を送る。大名ともなると、家臣も増え、目が行き届かなくなる。監視役を設けるべきだという家臣の進言を宗茂は退ける。「みなが隠し事をしなければいいだけのことだ」こともなげに言う宗茂に家臣たちは呆れてしまう。

しかし、宗茂が隠し事を嫌うことを知る家臣たちは、自ずと率直な言動をとるようになり、次第に誰もが言いたいことを言い合う、風通しのいい体制が整っていった。

**宗茂、天下人秀吉の前であっても、マイペース**

**持ち前の空気の読めなさで、新人いじめも意図せずはねのける**

大名として宗茂は度々、秀吉に呼び出され、大坂城を訪れる。秀吉との関係構築も大名として大事な仕事の一つだった。

同じように秀吉に呼びつけられた大名でいっぱいの大坂城。

秀吉は大名たちに「自分の悪いところをあげよ」と無理難題を言い渡す。機嫌を損ねることを恐れ、青い顔をした家臣たちを面白がる秀吉。

しんと静まり返る中、宗茂は「恩ある信長殿の子孫を死罪や流罪にしたことは道理に反するでしょう」ときっぱり告げる。あまりの発言に場は凍り付くが、宗茂は聞かれたことに答えたまでとあっけらかんとしている。秀吉も一瞬むっとした後、大笑いし、宗茂を裏表のない正直者だと褒めたたえた。

宗茂のまっすぐすぎる発言を聞いて、裏があるのではと勘繰る伊達政宗と、素直に受け止め、共感する真田信繁。二人はそれぞれに宗茂に関心を持ち、接触を持つ。

結果のためならどんな手段も辞さない野心家・伊達政宗と、まっすぐに義を貫こうとする不器用な武人・真田信繁。道雪と紹運を思わせる二人の武将と出会った宗茂は、同い年であることもあり、意気投合し、酒をくみかわす仲となる。

**～人物紹介～**

宗茂と闇千代を育んだ２人の父たち②

### 戸次道雪（1513～1585）

立花闇千代の実父で、宗茂の義父にあたる。大友宗麟の右腕。愛刀「雷切丸」で雷を切ったという伝説を持つ男。

1575年、娘の闇千代に立花城の家督を譲ったことで、闇千代は立花城の女城主となった。また、宗茂の資質も早くから見抜き、闇千代の婿として迎えている。豪放磊落な性格の道雪は、主君のためにどんな仕事も引き受けた苦労人でもあり、宗茂はそうした道雪の義を間近に見て育つ。

1585年、高野山（久留米市）の陣中にて病にかかり、命を落とした。



## 柳川にこの人あり vol.86

おきのはた図書館 ペチカ代表

### 島田 律（ただし）さん

沖端・33歳

### 子どもや大人が気軽に集える温かい場を

沖端地区に２月１日から３月31日まで、期間限定でオープンしている「おきのはた図書館 ペチカ」。沖端商店会や地元の人たちによるプロジェクトチームで作った同館の代表を務めるのが島田律さんです。

生まれも育ちも沖端という島田さん。大学卒業後は関西で就職しますが、100年以上続く実家の酒店を継ぐため柳川に帰郷します。

同館を作ったきっかけは、沖端の雰囲気を生かし老若男女が気軽に集える温かい場所を作りたいというプロジェクトチームの思いから。その思いと同様に、同館の名前をロシアの暖炉を意味し、北原白秋作詞の童謡としても有名な「ペチカ」と名付けました。空き店舗をメンバーが一丸となって作り上げた館内には、地元の人や活動を応援する人などから寄付された約2000冊の本が所狭しと陳列。児童向けの本や小説などさまざまなジャンルの本が並び、貸し出しも行っていて、子どもから大人までたくさんの人が楽しめるセルフ図書館になっています。

放課後に立ち寄る小学生からの「図書館をこれからも続けて」という声やふらっと立ち寄った観光客が、北原白秋コーナーを見て近くにある北原白秋生家・記念館に立ち寄るなど、地域活性化の手応えを感じているそうです。

「これからは若い人が中心となってやっていかなければならない。図書館を通じて地元の魅力を感じてくれれば」と島田さんは笑顔で語りました。

落ち着いた館内では、ゆったりと本を読むことができる

## 川柳

今月の入選作品・課題「待つ」「雑詠」

### 生むことも育てることも待つ仕事

山下雪江（吉富町）

胎内で芽生えた命が十月十日を経て身2つに。待ち望んだ小さな「生」。この小さな生をこれから親として見守り育てていかねばならぬ。知恵を授けるのを「教」、体をそだてるのを「育」だとすると「育」もどこかで「待つ仕事」でもあろう。今回は小学生の作品が光る。

流青

処置室の外の柳と春を待つ　（徳永エツ子　徳益）
悟られてなるか反り身の待ちぼうけ　（黒田和代　吉富町）
風吹けば船の帰りを待つ船屋　（古賀治美　南浜武）
一雨をダムも野菜も待っている　（浦　哲之　米）
きっと来る便りを待つという時間　（吉開綾子　筑紫町）
踏み付ける草の花にも春が来る　（甲木幸栄　蟹町）
母は待つ我が子をこの手に抱くまで　（井口まり子　間）
幸福がとなりにくるまで待っていた　（梅崎省二　佃町）
待ちわびる北方領土霧の中　（小杉達雄　中島）
また一つ趣味を広げて待つ市報　（佐田輝喜　明野）
着ぶくれて老いの重さも春を待つ　（佐藤良子　蒲生）
雨の日は傘に寄り添い春を待つ　（横山　保　徳益）
拉致家族北の開放待ち続け　（内村美子　七ツ家）
春を待つシャベルについた泥流す　（鶴岡定子　茂庵町）
世の憂いどこ吹く風と春立ちぬ　（津留和巳　六合）
黄水仙七ツで逝きし友思う　（岡本タマキ　蒲船津）
あったかいたきたてごはんをまっている　（田中良平　柳河小3年）
春を待つみんなのえがおきれいだな　（溝上嵐詩　柳河小5年）
待ち人のはく息白し大通り　（古賀純登　柳河小6年）

川柳を募集しています。選句者は梅崎流青さん。3月の課題は**「空」「雑詠」**。入選作品は4月1日号に掲載します。

●**応募方法**　川柳と明記し、自作、未発表の作品（**※1人3句以内**）に、住所、氏名、電話番号を書いて、ハガキかファクスまたは直接、柳川庁舎企画課広報広聴係（☎77・8425、FAX74・5520）へ、**3月15日（必着）**までにお送りください。

この空の果てに何ある大根蒔く　流青